

第2節 「陰獣」の身体描写 —マゾヒズム行為における嗜虐の愛と被虐の喜び—

はじめに

「陰獣」は「探偵小説」作家である寒川による一人称の語りを使い、回想の手記の形で描く物語である。「陰獣」のストーリーの発端は、変態趣味を持つ「探偵小説」家の大江春泥（平田一郎）の脅迫状を受けた小山田静子が、同じ「探偵小説」家の寒川、つまり語り手の〈私〉に相談を持ち掛けたところから始まる。静子は実業家・小山田六郎の妻で、最初はもの静かで控え目の女性として描かれている。しかし物語が展開して行くにつれ、やがて寒川は静子と恋仲になり、さらに静子の被虐性欲も知ってしまう。静子から自分の体を鞭打つように迫られた寒川は彼女と変態性欲の遊戯に耽るようになっていく。

このように静子はマゾヒスト(masochist)として描かれている。福田陸太郎・村松定孝共著の『新編 文学用語辞典』では、マゾヒズム(masochism)について以下のように説明している。

被虐愛、精神分析の用語で異性から虐待・屈辱を受けて快感を感じる一種の色情狂。オーストリアの作家サシャ・マゾク Leopold von Sacher-Masoch(1835~1895)がこうした変態性欲を取り扱った小説をよく書いたことに由来する。サディズム sadism に対することば¹。

以上の引用を見ると、マゾヒズムは基本的に肉体的・精神的苦痛を受けることで、羞恥心や屈辱感が誘発され、それによって性的快感を覚えるという一種の性的興奮である。逆にサディズムは相手に苦痛を与えることによって、性的快感を得る。静子はマゾヒズムという受身的な変態性欲を持ち、被虐者には間違いないが、彼女に被虐行為を嫌がる様子はなく、逆に積極的に鞭を寒川の手握らせて、自分の身体を鞭打つようにと迫る。この静子の行動を見れば、彼女は性的役割において実は主導権を握っているのではないかと筆者は思う。もともと弱い女性として、そして被害者として描かれている静子は後半になると

¹ 福田陸太郎・村松定孝『新編 文学用語辞典』、こびあん書房、1987年、p.245。

「魔性の女」に変身していく。この一節ではマゾヒズムという異常性欲に着目し、主人公の寒川と、女主人公の静子の変態性欲を中心に分析し、「陰獣」における身体描写を論じたい。

1. 寒川の嗜虐の兆し

寒川が初めて静子と出会った時、彼女の背中に不思議な傷痕を発見した。そしてその傷痕は「赤黒い毛糸を這わせた様に見えるその蚯蚓脹れが、その残酷味が、不思議にもエロティックな感じ」(p.563)であった。やがて静子に秘密を打ち明けられ、彼女を助けると約束した。寒川は大江春泥の脅迫状の内容の真偽を調査するために、春泥を真似して、静子の家の屋根裏に上った。屋根裏から見下したときに目にした静子は妙な色気を発し、その静子の姿について、次のような一節がある。

そして、そのねっとり青白い皮膚の上には例の毒々しい蚯蚓脹れが、ずっと奥の暗くなって見えぬ所までも、いたいたしく続いているのだ。上から見た静子は、やや上品さを失った様ではあったが、その代りに、彼女の持つ一種不可思議なオブシニティが一層色濃く私に迫って来るのを感じた。(p.595)

以上の一節を見ると、静子との出会いの時の感想も含めて、寒川は彼女の傷痕を「エロティック」「オブシニティ」と感じている。それだけでなく、小山田六郎が死んだ後、寒川は静子とますます親しくなっていく。公然と彼女の家に入出入するようになってから、寒川は静子の寝室で「外国製らしい小型の鞭」(p.612)を見付けた。その鞭を見て、寒川が静子と初対面の時にみた静子の傷痕は、その夫の小山田六郎によって付けられるものと直感した。そして「悩ましい欲望は、油を注がれた様に、恐ろしい勢で燃え上った」(p.612)と自身の変態趣味の萌芽に気付いた。

しかし寒川は「若しや私も、非常に恥しいことだけれど、故六郎氏と同じ変質者の一人ではなかったのであろうか」(pp.612-613)と苦悩する。つまり自分の変態趣味の萌芽に気付いた寒川は自分の変態趣味を認めることができず、そして道徳心と間に狭まれた性格の衝突が、やがて一連の事件の結末にも影響を及ぼす。

2. 静子の被虐願望（マゾヒズム）

マゾヒズムについてはこの一節の「はじめに」に『新編 文学用語辞典』の解説を引用したが、ここでは、心理学を紹介しつつ、「陰獣」におけるマゾヒズムを見てみたい。フロイトの精神分析学では、マゾヒズムを「道徳的マゾヒズム」「性愛的マゾヒズム」「女性的マゾヒズム」に区分している。そしてその差異について、マルガレーテ ミッチャーリ(Margarete Mitscherlich)の『女性と攻撃性』では次のように説明している。

道徳的マゾヒズムでは無意識的罪責感とその懲罰欲求が前面に出てくる。そのような場合、自分自身を不利な方向へ、あるいは犠牲的状况へと追い込むが、こうした行動が性的喜びや満足感を得ることはない。このような道徳的マゾヒストは〈成功しそこなった〉タイプの人間にみられる。

性愛的マゾヒズムでは性的喜びと苦痛とが結びついており、このタイプのマゾヒズムはたしかに性的倒錯の一種である。

女性的マゾヒズムは、少なくとも精神分析的には、女性的本質の表われである。女性的マゾヒズムの虜になっている人はその幻想の中で、〈いかにも女性らしい立場〉に自分を置く。一般にこれは奉仕や自己犠牲に特別な喜びを感じる人の受身的な態度を指している。こうした苦しみを喜びとすることには性愛的色彩が感じとれるかもしれないが、女性的マゾヒズムではそのようなことはない²。

以上の説明を見ると、「性愛的マゾヒズム」とは被虐行為によって感じる性的快楽の一種である。本作品の女主人公の静子は「被虐色情者」(p.639)と描写されており、彼女のマゾヒズムは明らかに「性愛的マゾヒズム」に属している。また G.C.デビソンと J.M.ニール共著の『異常心理学』では、性愛的マゾヒズムの表れ方について次のように説明している。

性的マゾ^{ママ}キズムの表れ方はさまざまである。一つの方法は自傷行為である。拘束（身体的束縛）、目隠し（感覚的束縛）、叩く、鞭打ち、電気ショ

² マルガレーテ ミッチャーリ著、杉村園子・関田淳子・後藤久子・柳沢ゆりえ共訳『女性と攻撃性』、新思索社、2007年、pp.197-198。

ック、切り傷を負わせる、辱しめ（排便をさせたり、犬のように吠えさせたり、言語的虐待を与えたりする）などが例である³。

以上の引用が示すように、性的マゾヒズムはさまざまな自傷行為を通して、性的快感を感じる行為である。「陰獣」の女主人公の静子の身体に残る傷は明らかに鞭で打たれた傷痕である。そして静子と寒川の情事にも鞭打ちの描写が見られることから、静子の性的マゾヒズムは主に鞭打ちによる行為である。鞭打ちはもともと一種の刑罰である。古代では奴隷や犯罪者の反省、自白を強要するために鞭打ちを用いる⁴。今でも犯罪者に羞辱や懲罰などを与えるために公開で鞭打ちの刑を行う国がある。鞭打ちを受ける時は、肉体上の苦痛に伴って、心理上の羞辱と精神上的の圧迫感が強烈に感じられる。そして中田耕治は「主人は奴隷に対して、絶対的な支配力をもっていた。鞭打ちは支配のための手軽な手段でもあった⁵」と説明している。このように鞭打ちの施行者と鞭打ちの受け手の間には支配と従属関係が見られる場合が多い。

マゾヒストにとって、肉体的・精神的苦痛を通して、羞恥心や屈辱感が誘発され、性的快感が覚えられる。肉体上の苦痛と精神上的の羞辱が両方体験できる鞭打ちの行為は被虐待者に性的快感を与える行為であり、本作品の女主人公・静子に関しても鞭打ちを甘受する様子が描かれている。そして鞭打ちの施行者が支配者で、受け手が被支配者という従属関係から見れば、鞭打ちの受け手である静子はやはり被支配者の立場にあることがわかる。鞭を寒川の手握らせて、自分の身体を鞭打つようにと迫る静子の行動から見れば、彼女は被虐待性願望があり、そして相手の男性に積極的にそれを求める女性として描かれていることがわかる。つまり静子は性的な関係において被支配者という役割を自ら求めているということである。

3. マゾヒズムから見る静子の男女関係

静子と恋愛関係のある男性が3人いる。静子の学生時代の恋人・平田一郎、夫の小山田六郎、そして探偵作家の寒川である。その中で小山田六郎と寒川との間にはマゾヒズム的性行為が見られるので、この小節は被虐待者の性行為に

³ G.C.デビソン、J.M.ニール共著、村瀬孝雄監訳『異常心理学』、誠信書房、1998年、p.359。

⁴ 中田耕治『中田耕治コレクション5 鞭打ちの文化史』、青弓社、1994年、pp.41-42。

⁵ 注4前掲書参照、p.44。

おける依存関係という観点から、静子と二人の男性、小山田六郎と寒川との男女関係を論じる。

静子と小山田六郎の夫婦関係は円満であるが、静子の体には鞭に打たれた傷痕が残る。静子がマゾヒストになったきっかけについて寒川は「恐らくは長い間の六郎氏の残虐が、とうとう彼女にその病癖をうつし、彼女は被虐色情者の、耐え難い慾望にさいなまれる身となり果てていた」(p.639)と推測している。しかしこれはあくまでも寒川の推測なので、本当かどうか定かではない。

静子と寒川の男女関係であるが、小山田六郎が死んだ後、寒川との4回目の対面（小山田六郎の死体が発見された当日）において、彼女は泣きながら寒川に縋り付いた。その後の対面においても二人の関係は確実に進展していく。例えば6回目の対面で、寒川は静子に口付けをし、そして7回目の対面で、寒川は静子を抱き、逢引の要求を提案した。もともと夫の小山田六郎への依存関係は夫の死によって、その依存の対象を失う。それで次の依存対象を寒川に求めるようになったが、二人の関係は長く続かなかった。寒川が静子に2回目の推理を話した場面描写はおそらくこの作品のクライマックス場面と思われるが、その時の静子の反応を以下の表（二）にまとめておく。

表（二）寒川が静子に自分の2回目の推理を話す時の静子の反応

※筆者作成

| 寒川の推理 | 静子の反応 |
|--|---|
| <p>【A】 大江春泥の著書から「一人二役」の可能性に気づいたことを静子に話す</p> | <p>「あたし怖いわ」静子はしっかり私の手を握りしめて云った「あなたの話し方、気味が悪いのね。もうよみましょうよ、そんな話。こんな薄暗い蔵の中じゃいやですわ。その話はあとにして、今日は遊びましょうよ。あたし、あなたとこうしていれば、平田のことなんか、思出しもしないのですもの」(p.653)</p> |
| <p>【B】 大江春泥の住所を調べ、地図でそれらの住所を線でつないでみた結果、不規則な円周</p> | <p>その時、静子は何を思ったのか、私の手を離して、いきなり両手を私の首にまきつけると、例のモナ・リザの唇から、白い八重歯を出して「怖い」と叫びながら、彼女の頬を私の頬に、彼女</p> |

| | |
|--|---|
| <p>を描いていることがわかり、そしてその円周の中心が今回の事件解決の鍵であると話す（空間的な一致）</p> | <p>の唇を私の唇に、しっかりとくっつけてしまった。やや暫くそうしていたが、唇を離すと、今度は私の耳を人指し指で、巧みにくすぐりながら、そこへ口を近づけて、まるで子守歌の様な甘い調子で、ボソボソと囁くのだった。</p> <p>「あたし、そんな怖い話で、大切な時間を消してしまうのが、惜しくてたまらないのですわ。あなた、あなた、私のこの火の様な唇が分りませんの、この胸の鼓動が聞えませんの。サア、あたしを抱いて。ね、あたしを抱いて」(pp.654-655)</p> |
| <p>【C】 大江春泥という名前がぱったり雑誌に見えなくなった時期と、小山田六郎が外国から帰朝した時期と一致することを静子に話す（時間的な一致）</p> | <p>私がそれを云い切らぬ内に、静子は部屋の隅から例の外国製乗馬鞭を持って来て、無理に私の右手に握らせると、いきなり着物を脱いで、うつむきにベッドの上に倒れ、むき出しのなめらかな肩の下から、顔丈けを私の方にふりむけて、「それがどうしたの、そんなこと、そんなこと」と何か訳の分らぬことを、気違いみたいに口走ったが「サア、ぶって！ぶって！」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであった。(p.655)</p> |
| <p>【D】 女流探偵作家の平山日出子が実は男性であることを例として、春泥が女性である可能性を言う。そして静子の不審な行動を指摘する</p> | <p>「あんまりです。あんまりです」裸体の静子が、ワッと悲鳴を上げて、私にとりすがって来た。そして、私のワイシャツの上に顔をつけて、熱い涙が私の肌に感じられた程も、さめざめと泣き入るのだった。(p.657)</p> |
| <p>【E】 静子が大江春泥の細君に変装したのではないかと推測する</p> | <p>私は静子をつき離れた。彼女はグッタリとベッドの上に倒れかかり、激しく泣入って、いつまで待っても答えようとはしない。私はすっかり</p> |

| | |
|-------------------------|---|
| | 興奮してしまって、思わず手にしていた乗馬鞭をふるって、ピシリと彼女のはだかの背中へ叩きつけた。(中略) 彼女は私の鞭の下に、いつもするのと同じみだらな恰好で、手足をもがき、身をくねらせた。そして、絶入るばかりの息の下から、「平田、平田」と細い声で口走った。(p.658-659) |
| 【F】大江春泥が架空の人物ではないかと指摘する | 静子はベッドの上で、死んだ様になって、黙り込んでいた。ただ、彼女の背中の中の赤蚯蚓丈けが、まるで生きているかの様に、彼女の呼吸につれて蠢いていた。彼女が黙ってしまったので、私もいくらか興奮がさめて行った。(p.659) |
| 【G】寒川が自分の推理を静子に語る | 私はグッタリしている静子の肩に手をかけて、軽く揺った。だが、彼女は恥と後悔の為に顔を上げることが出来なかったのか、身動きもせず、一言も物を云わなかった。(p.663) |

以上の表(二)を見ると、寒川が推理を始めた時、つまり【A】から【C】まで静子の行為描写から見ると、彼女は寒川の推理を遮ろうとして嬌態を演じ、また【C】では、静子はさらに「サア、ぶって!ぶって!」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであった」(p.655)と自分の身体を鞭打つように寒川に要求した。しかし【D】の場面において、寒川は静子の求めを断り、彼女が真犯人であると指摘すると、静子は悲鳴をあげて寒川にすがりつく。この時点で、静子はもう寒川に対して鞭打ちをねだってはいなかった。そして【E】の場面であるが、静子はもう何の反応も示さなくなり、ただ死んだように黙り込んでいる。彼女は自分のために何の弁明もせず、そして翌日に突然に亡くなったのである。

静子は平田一郎のことを夫の小山田六郎に告げなかった。そして六郎が死んだ後、静子はその依存対象を寒川に変えた。しかし以上の静子の一連行動を見るとわかるように、寒川に詰られた時でも彼女は自分の本当の考えを言わなかった。彼女は小山田六郎に対しても、寒川に対しても、結局のところ自分の本当の秘密と真意を明すことはなかった。

静子は六郎や寒川とマゾヒズム行為を通して結ばれたが、彼女は二人の男性を本当に愛したかどうか、「陰獣」ではわざと曖昧な書き方をしている。【E】の一節では、静子の無反応に刺激されて興奮した寒川が「夢中になって、これでもか、これでもかと、幾つも幾つもうち続けた」(p.658)と静子を激しく鞭打ったが、鞭打たれた静子は「平田、平田」と細い声で」(p.659)昔の恋人の平田一郎の名前を口走っただけであった。なぜこの場面で平田の名前が出されているのか、静子の真意と本当の気持ちは彼女の突然すぎる死と同じく謎のままである。

おわりに

この一節では、マゾヒズムという異常性欲に着目し、主人公の寒川と静子の恋愛関係を分析し、「陰獣」における身体描写を検証してみた。

まず寒川は静子の傷痕に惹かれ、さらに性的欲望を抱く点から見れば、彼は加虐性欲の持ち主（いわゆるサディスト）であることがわかる。それに対し、女主人公の静子のマゾヒズムの自傷行為は主に鞭打ちである。鞭打ちによる肉体の苦痛、精神の羞辱、支配と従属関係という特性を見れば、静子は肉体の苦痛と精神の羞辱を通して性的快感を感じているのみならず、支配されたい一面もある。そして静子の夫・小山田六郎と寒川にはサディズムの傾向があり、静子は彼らとの肉体関係を通して自分の被虐願望を満たしているのである。

マゾヒズムをテーマとする乱歩の作品は「陰獣」のほかに、「D坂の殺人事件」がある。しかし「D坂の殺人事件」はいわゆる本格推理に属する作品であるのに対し、「陰獣」はトリックや理論的推理など、推理物の理知的な要素を持ち合わせている反面、マゾヒズムをテーマとした身体描写も繊細に描かれている。二つの作品を比べると、理論的推理と怪奇幻想の要素が巧みに絡み合う「陰獣」は乱歩の独自性を遺憾なく発揮する作品と言えよう。

また、マゾヒズム行為を描く文学作品は少なくない。例えば谷崎潤一郎作品にもよく見られる。細江光は『谷崎潤一郎深層のレトリック』一書において、谷崎潤一郎の作品のマゾヒズムのパターンについて分析している。それはおおむね「女性化願望」「女性拝跪」「奴隷・従者・奉公人など」「落魄・流浪・陋巷趣味」「間男されても腹を立てない、浮気な女・三角関係をむしろ喜ぶなど」「肉体的なマゾヒズムの古典的な形態」「顔に対する攻撃」「殺されること」「動物化・

物質化」「老人化」「少年化」「幫間」などの12種類が見られる⁶。谷崎潤一郎から影響を受けた乱歩も自分の作品にそれらの類別の特徴が見られる作品を発表している。

例えば細江光は「女性拝跪」について「女性を聖母マリア・永遠女性・女神・菩薩・天女・女王・高貴な女性などとして崇拜するだけで、それに比べて自分は極めて卑小な存在であると感じ、超えがたい一線が両者の間にあるものを、一つの類型として「女性拝跪」と名付けて置く⁷」と説明しているが、乱歩の作品に照らしてみれば、「人間椅子」の〈私〉が、憧れの対象である佳子に対する感情はまさに「女性拝跪」である。そして「陰獣」のマゾヒズム的描写は細江光が「一般に最も良く知られているマゾヒズムの形態は、縛られて鞭で叩いてもらうようなタイプであろう⁸」と説明する「肉体的なマゾヒズムの古典的な形態」に属している作品だろう。

以上に見てきたように、中島河太郎が「乱歩は純粹理知文学である推理小説の先駆者の栄誉をになったばかりでなく、潤一郎、春夫の怪奇幻想文学の継承者でもあった⁹」と評価したのも頷けるだろう。



⁶ 細江光『谷崎潤一郎深層のレトリック』、和泉書院、2004年。

⁷ 注6前掲書参照、p.101。

⁸ 注6前掲書参照、p.105。

⁹ 中島河太郎『推理小説展望』、双葉社、1995年、p.69。